

古代中国における庭園の発展および浄土と浄土庭園

呂 舟

(清華大學／中華人民共和國)

1. はじめに

中国庭園はその起源を殷代まで遡ることができ、世界で最も長い歴史をもつ庭園体系の1つである。隋・唐以後の中国庭園には「境地」を強調する傾向が見られ始め、それが最終的に中国庭園の基本的な特徴の1つとなった。中国文化の主要構成部分および担体である中国庭園は、唐・宋時代の遣唐使を通じて東アジア各国における庭園の発展に影響を与え、18・19世紀には西洋の宣教師を通じてヨーロッパの庭園へも影響を及ぼした。中国庭園の発展過程を見ると、中国の伝統的な哲学、信仰、宗教などのいずれもが庭園の主題や形態的特徴に反映されている。

浄土宗は中国仏教の一宗派であり、唐・宋以後の中国社会に一定の影響を与えるとともに、東アジア地域へも伝わった。浄土宗は日本庭園の発展に重要な影響を及ぼしたが、中国庭園の発展過程では明らかな足跡を残していない。

敦煌壁画の中には「浄土変」と呼ばれる題材がある。こうした壁画は、人々が憧れる西方浄土の美しい有り様を描いている。それら浄土世界を描いた絵の中では、通常は建築物を取り囲んでいる蓮池に大きな平台があって、その上で仏・菩薩たちが厳かに座り、伎楽天(音楽の神)や飛天(空を飛ぶ神)たちも美しい姿や踊りを見せている。「こうした建築物と水面の配置方式が中国の伝統的な庭園の発展とどのような関係にあるのか」、および「それが庭園や寺院の完成された配置方式なのか」という点は研究に値する課題であろう。

2. 漢・魏・両晋(東晋・西晋)時代の中国庭園

中国庭園の起源は殷・周時代より古く、すでに『詩経』の中で庭園に関する記述が見られる。この時代の庭園は植物園のような形態をとるものが多く、天子や諸侯のために营造され、行宮(天子が外出時に使う施設)、農園、狩り場などの機能を兼ね備えていた。そのような庭園は秦・漢以後に壮大な規模の皇室庭園へと姿を変えていったが、その行宮、農園、狩り場などの機能はやはり維持された。ここで注目すべきなのは、この時代の皇室庭園における建築物、水、山などの要素が次第に庭園の基本構成部分となっていった点である。中国史上初めて統一帝国となった秦は、その短い歴史の中で多くの宮殿や庭園を营造している。帝王が神仙の伝説を盲信して不老長寿を追求したため、庭園の营造に際しては「大海や伝説中の仙人が住む島を模した大面積の水面と島」という表現方式がとられ、それによって水面と島も皇室庭園の象徴的かつ重要な要素となった。

秦が漢に代わられてから、「漢自ずから制度有り」と言われたものの、都市建設や宮殿・庭園設計といった面では、明らかに秦代の基本的な考え方が数多く継承された(庭園の広い水面など)。漢代の皇室庭園は非常に規模が大きく、巨大な池を開削して自然の水系を引き入れることを除き、大多数はやはり基本的には自然の一部を切り取って少し手を加えるだけで、遊んだり、狩りをしたり、植物を育てたりできる庭園としている。こうした庭園の营造方式は、当

時の貴族や富豪の庭園にも影響を与えた。文献に見られる袁広漢(富豪の名前)の庭園では、園外から引き入れた急な水流、鳥や魚が飛び躍る広い水面、砂洲や人工的な築山などとともに、数多くの樹木や花卉もあり、サイなどの動物が飼育されていた。

三国時代の動乱を経て氏族が台頭して皇帝の権力が弱まり、度重なる政治の変動が両晋時代の社会的な特徴となった。この時代の文人・士大夫(文民官僚)階層の間では、黄帝や老子に対する崇拜、玄学(老子・莊子の哲学)の発展、山水への憧れ、自由奔放な生活などが流行している。玄学や隠遁が同時代の文人・士大夫を象徴するものとなり、社会では気骨や品格を追求する文人・士大夫階層が高い名声や人望を得た。皇室は隠遁した名士を絶えず朝廷に召し戻し、社会の審美観や趣味もこの階層から影響を受けている。この時代には大規模な皇室庭園や個人庭園があまり营造されなくなっていたが、自然に対する審美観や物への愛着といった文人趣味、延いては名士たちの暮らし方が同時代の文化に深い影響を与えた。

永和九年、歳は癸丑^{とし きちゅう}に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事^{けいじ}を脩^{おさ}むるなり。群賢畢^{ぐんけんことごと}く至^{しゅうしゅうみな}り、少長咸集^{すうざんしゅんれい もりん}まる。此の地に、崇山峻嶺^{しゅうしゅん}、茂林脩竹^{げきたん}有り。又、清流激湍^{りゅうしゅう}有りて、左右に映帶^{えいたい}す。引きて以て流觴^{せい いえど}の曲水と爲し、其の次に列坐^{いちしゅういちえい また}す。糸竹管弦^{ちようじよ}の盛無^{みそぎ}しと雖も、一觴一詠、亦以て幽情を暢叙^{さかづき}するに足る。¹⁾

[訳注：現代語訳]

永和九年(西暦353年)癸丑の年、晩春の初め、我々は会稽山陰の蘭亭に参集した。禊^{みそぎ}をとり行うためである。賢者がことごとく群れ集まり、また老いも若きも集まった。此の地はそそり立つ高い山と険しい峰、よく茂った林と真っ直ぐ伸びた竹に恵まれている。清らかな流れには早瀬があり、辺りにきらめいている。この流れを引き込み、觴^{さかづき}を流す曲水を設け、集まった者は順次座った。琴や笛の音は無いが、觴^{さかづき}を一杯飲んで

一首の詩を詠う。この趣は深い自然の中にあって深奥の情を醸し出すに充分である。)」

このように王羲之の『蘭亭集序』で表現された情緒や審美観は、中国の文人・士大夫階層、延いては中国伝統文化の主要な特質となっている。

両晋時代も中国で仏教が発展した重要な時代である。漢代に伝わって来た仏教は、この時代に宮廷から民間へ次第に伝播し始めている。しかし興味深いことに、西域から来た僧侶に加えて、東晋の慧遠など多くの高名な僧侶も黄帝や老子の教えに精通していた。慧遠は、当時の名士たちと交際しただけでなく、中国仏教の浄土宗で最も古い団体と思われる白蓮社を創始したが、これは当時に流行していた隠士の集団とも言える。慧遠が良き地を選んで東林寺を建立するときに表した審美観や趣味は、当時の玄学に通じた名士たちと同じであった。それについては、「慧遠が建立した精舍(寺院)は、山の美しさを充分に活かしている。そこは香炉峰を背負い、横の谷間には滝がある。石で基礎が築かれ、松も植えられている。清い泉と石段があり、白雲が部屋に満ちている」²⁾と記されている。

3. 浄土宗と「浄土変相」壁画

浄土宗は中国で発展した宗派であり、その歴史に関する研究では東晋時代の慧遠大師(西暦334 ~ 416年)まで遡られ、「慧遠は玄学も含む広い学問を修め、儒学にも長じていた³⁾」という記述が見られる。慧遠は、晋代の社会、政治、文化などの影響を受け、因果応報の教えを深く信じて西方阿弥陀浄土への転生を願っていた。そして、「慧遠は、靈魂不滅の思想を信じ、生死の因果応報に深い恐れを抱いていたため、浄土へ転生する大願を起こした。元興元年には、劉遺民、周統之、畢穎之、宗炳、雷次宗、張萊民、張季碩などとともに、精舍の無量寿佛像前に堂を建て、西方浄土を期すことを誓い合った。そのとき劉遺民に“寅年の7月(戊辰朔)28日(乙未)、釈慧

遠法師は、奥妙の理を深く感じて謹厳な心となり、志を同じくする篤信の者たち123名に集まるよう命じ、廬山にある陰般若雲台精舎の阿弥陀像前で香と花を供え、恭しく誓いを奉げる”と書かせた⁴⁾と記されている。これが中国浄土宗の始まりと考えられており、慧遠が西暦386年頃に廬山で建立した東林寺は浄土宗の発祥地とされた。

ここで注目に値するのは、玄学に精通した当時の名士たちが廬山で数多く慧遠と交わったが、慧遠が創始した白蓮社という浄土宗の団体に属する一部の者も玄学の深い造詣をもっていた、という点である。ある意味において、白蓮社は「隠士集団」と見ることもでき、彼らの審美観にも玄学の色彩が反映されている。

正式に浄土宗を創始したのは北魏の曇鸞である。それについては、「北魏の曇鸞は五台山の近くに住み、内外の経書を読んで文理に通じ、仏性に関する四論(四つの仏教書)を極め尽くしていた。後に南の梁へ行き、武帝に重んじられる。洛陽へ帰った後に会った菩提流支(インド出身の僧侶)から『観無量寿経』の講義を受け、遂に悟りを得た。晩年には汾州北山の石壁玄中寺に住んで専ら浄土の教えを説き、『礼浄土十二偈』と『安樂集』の二巻を著わして世に広めた。そのため、後世の人から浄土宗の開祖と仰がれている⁵⁾」と記されている。曇鸞の後を承けた道綽は、引き続き玄中寺で浄土宗の発展に努めつつ『浄土論』二巻を著わし、浄土宗の第二祖と呼ばれた。

浄土宗の第三祖と考えられている善導(西暦613～681年)は、『観無量寿仏経疏』、『往生礼賛偈』、『浄土法事贊』などを著わした。ここで特に注目すべきなのは、善導が300幅もの「浄土変相」図を描き、「浄土変相」の製作を一種の修行や功德と位置付けている点である。こうした題材の壁画は当時の寺院によく見られ、仏教の信仰を広める方法の一種と言える。敦煌莫高窟の唐代に開削された洞窟では、そうした浄土変相を題材とした壁画が今でも見られる。

敦煌に現存している「浄土変相」では主に西方極楽世界の様相が描かれており、壮大な建築物、七宝の蓮池、八功德水、咲き誇る花々、菩薩、楽師、飛天などにより西方極楽世界の風景が構成されている。しかし、このような風景を空想だけで描くのは難しく、それには実際の手本があるはずである。帝王の宮殿や大規模な寺院などのいずれもが、そうした「浄土」図を創作する源泉となったのであろう。唐代の宮殿跡に関する研究では、浄土変相における建築物の配置方式と唐代の宮廷建築との関係が明確に判明している。そして、池や蓮の花といった要素は明らかに仏教經典に基づいて描かれたものであり、「七宝の蓮池」や「八功德水」の付属物と言える。

宋代以後の一部寺院では「浄土池」といった呼称が使われているが、浄土変相図に浄土宗寺院の特別な配置規則が反映されていることを直接的に証明するものはない。実際には、中国の社会で流行していた「自宅を寺院に寄進する」徳行の方が寺院の配置方式に大きく影響している。

4. 仏教と作庭思想の伝来

多くの場合、古代中国の文化には文人・士大夫の文化的特徴が表れている。社会の精鋭とも言える文人・士大夫階層の思想や気風は、社会の思想や気風を主導しつつ社会の中心的な意識を構成していた。唐代以後における中国庭園の発展を見ると、次に挙げる2つの傾向が表れ始めている。第一に、皇室庭園に代表される壮大さや華麗さを追求した庭園の風格である。中国の芸術史上において、こうした傾向は李昭道や李思訓に代表される青緑工筆の山水画と対応し、贅沢で絢爛豪華な審美観や趣味を表現している。第二に、文人庭園に代表される簡素で清雅な庭園の風格である。これは盛んになり始めていた、筆や墨の趣味にこだわる文人画と対応し、詩境を追求した審美観や趣味を表現している。

唐代の皇室庭園で最も重要なのは大明宮の御苑である。御苑の中央部に1.6haの太液池があり、池の

中には島が築かれ、池の周囲には数多くの建築物が配されている。興慶宮も同じく唐代で最も有名な宮殿だが、その庭園区域は池を中心に据えた配置になっており、池の遺跡面積は約1.8haである。この池の周囲に宮殿建築が配置され、帝王は、それら宮殿の中で外国の使者を迎えたり、殿試(科挙の最終試験)を行ったり、各種の催しを見たりした。東都・洛陽の西苑でも人工的に開削された「北海」が中心に据えられ、その「海」の中に3つの島が設けられている。ただし、既存の文献を見ても、「浄土変相」に類似した配置方式、または「浄土変相」形式の影響を受けた建築配置は認められない。

唐代は個人庭園が急速に発展した時期であり、特に文人庭園が流行した。王維の輞川荘は境地を重んじつつ営造された中国庭園の典型とされ、白居易も生涯で多くの庭園を営造している。王維とその友人たちは、輞川荘で景色を愛でたり、詩作したりして風景に心を託し、詩文を『輞川集』にまとめ、風景画を『輞川図』にまとめた。これは中国の造園史上で大きな意義をもっており、中国庭園の新境地を開くものと言える。文人の個人庭園は、境地を重んじた庭園営造を提唱および実践する場となっている。王維は『山中で秀才・裴迪に与える書』の中で以下のように記した。

「夜に華子岡へ登ると、輞水のさざ波が月影とともに上下している。寒山の遠い灯りの明滅が林の外から見える」

「春になると草木が生い茂り、山が美しくなる。敏捷な鰍が水面に躍り、白い鷗が翼を広げて、朝露が緑の草を濡らし、朝には麦畑で雉が鳴く。こうしたことがもうすぐ訪れるが、(君は)私とともに遊べるか」

高遠で晴れやかな境地が紙上で躍っているように感じられる。

白居易は、庭園について「新昌の小院(小さな庭)では松が戸に当たり、履道坊の閑居では、竹が池を囲んでいる。いずれも空しい宅と言うなかれ。林、

泉、風、月などが家の財なのだ」と記している。白居易の心中では、林、泉、風、月などが庭園を営造する目的なのである。彼の庭園では草木が心を持ち、石や竹などのすべてに品格がある。そして、「淡泊な性質の水は我が友とでき、虚心な竹は我が師である」や「池は暮れて蓮も闇の中に消え、秋の窓に見える竹の意は深い」とも記している。

唐代における庭園の営造法は、両晋や南北朝のとき形成された隠士文化の延長と見なすことができ、都市の中の山林、閑居の実現、および心の自由という理想を追求している。君主に影響を及ぼしながら平民から尊敬される対象ともなる階層のこうした心のあり方は、容易に庭園へ影響を与え、それを一種の芸術作品と見る考え方に導いていく。

宋代の文人・士大夫階層は、帝王から尊重されて高い社会的地位を得るとともに、社会に対する大きな影響力も有していた。文人画、特に山水画が発展するにつれて、庭園の「詩情画意」を大切にしつつ境地の表現を重視する手法がさらに成熟し、絵画の写意的な表現手法により庭園設計の進歩がさらに促進された。宋代には個人庭園がますます流行し、「数多くの樓台が30里にもわたって築かれ、どこに静かな山があるのかも分からない」といった状況を呈するまでになっている。このような背景の下、宋代には文人庭園が次第に成熟し、「簡素・高遠」、「簡明」、「優雅」、「天然」などを特徴とする庭園の風格が現れた。

宋代以後に帝王が文人化していく傾向を受け、皇室庭園の営造に際しても文人庭園の特徴がますます表現されるようになった。例えば、宋代で最も有名な皇室庭園である「艮岳」については、規模を大きくして数多くの珍しい石や植物を各地から集めていることを除き、その設計手法は当時の文人庭園とさほど変わらない。宋の徽宗皇帝は、そうした点を自ら説明するため「岩、谷、洞穴、亭閣、樓台、樹木、草などが高くまたは低く、遠くまたは近く、出たり入った

り、華やかであったり、枯れていたりするように配されている。周囲を歩き回って仰ぎ見ると、まるで深い山間の谷底にいるようだ」と記述している。このような傾向は、連綿と清代まで引き継がれた。

寺院庭園は中国庭園の主要な部分の1つである。しかし、現存する実物や明確な考古材料がないうえ、この時代の寺院庭園に関する文献の記述は、ほとんどが非常に簡単である。例えば、長安の大薦福寺については「寺の東院には放生池があり、その周囲は200歩余りで、漢代には洪池陂と呼ばれたと伝えられている⁶⁾」、長楽坊の光明寺については「庭園に山や池があり、数多い古木が高く聳えていて、まるで山間の谷のように静かだ⁷⁾」と記されている。一部の寺院では庭園の池が埋め立てられた。例えば、崇義坊の招福寺については「元は寺の中に池があったが、永樂東街の土で埋め立てられた」、大興善寺については「元は寺の裏に曲池があったが…今は陸地に戻っている⁸⁾」と記されている。現有の資料を見ても、唐代の寺院庭園が独自の完全な風格と比較的に成熟した方式を備えていたかどうかは読み取れない。ここで注目に値するのは、唐以後の高僧たちがしばしば極めて強い文人氣質を発揮しているとともに、その多くが当時の名士と密接に交わっている点である。そのため、寺院庭園でも文人庭園の特徴が表現されているのだ。こうした状況下では、ある種の固定的な形態を重んじる庭園形式はなかなか影響力をもてない。

宋代は中国で浄土宗が繁栄・発展した時代である。しかし、その影響力は禅宗に比べるべくもなく、浄土宗寺院の独特な配置や庭園形式に関する文献も見当たらない。それに比べて、江南の重要な禅宗寺院である靈隠寺は、単なる寺院と見られるのではなく、当時の有名な景勝地とされていた。それについては、「東南の山水では余杭が第一、郡では靈隠寺が第一、寺では冷泉亭が第一である。この亭は寺の西南部で山下の水中にあり、あまり高くなく、大きくもないが、すばらしい景色を見ることができ、すべてを見

通せる。春には草木が美しく、穏やかかつ純粹に人の氣血を巡らせる。夏には泉の風が涼しく、憂いがなくなって酒の酔いも醒め、人の心を静めさせる。山の木々が屋根となり、岩が屏風となっている。雲が建物から生じ、水と石段が平らになっている⁹⁾」と記されている。自然や野趣の追求も明らかに当時の寺院の庭園や環境がもつ特徴となっており、こうした特定の文化的要素を伴う自然や野趣は、少なくとも高尚な趣味を反映させた庭園形態の一種と考えられる。そして、個人庭園、寺院庭園、延いては皇室庭園のいずれでも達することが期待される境地なのである。

5. 中国庭園における水と水庭

水は中国庭園の重要な要素であり、庭園に動きを与えるとともに、詩心や画境の担体ともなる。白居易が庭園について詠んだ詩文では水に関する明確な記述が見られ、王維の輞川莊にも茱萸片、欽湖、金屑泉といった水景がある。皇室庭園でも水は不可欠な構成部分となる。皇室庭園での水は、景観要素の一種であるだけでなく、例えば領土や神仙の国などを象徴する一定の意味をもつ。そして、水と山のバランスは中国の伝統的な世界観の反映とすることができ、「仁者は山を楽しみ、智者は水を楽しむ」という観念も庭園の营造に反映される。また、中国で水が財産の象徴とされていることも、庭園を营造する人々に水体をより重視させている。

秦代には、「始皇帝は渭水を引いて池となし、それは東西200丈、南北20里にわたる。また、蓬萊山を築いて鯨を石で刻み、その長さは200丈である¹⁰⁾」という記述が見られる。

漢代に武帝が開削した昆明池については、「池の中には豫章台と石の鯨があり、その石で刻まれた鯨の長さは3丈である。それは雷雨のたびに吼え、鬣や尾を振る」、「池の中に龍首船を浮かべ、しばしば宮女たちを乗せていた。鳳蓋を張り(皇帝の儀仗)、華やかな旗を立てて、歌を唄ったり楽器を

演奏したりし、皇帝自ら豫章台へ赴いた¹¹⁾、「武帝は月を愛でるために池を開削し、その横で月を眺めるために望鵲台^{ぼうこくだい}を建てた。月の影が池に映ると、宮人を船に乗せて月影で遊ばせた。それは影娥池または眺蟾宮と呼ばれた¹²⁾」などと記されている。また、建章宮の中にも池が掘られ、池の中に仙人の島を象徴する3つの山が築かれた。そして、一部の豪族や富豪の個人庭園でも、水は重要な要素とされている。『西京雜記』では、袁広漢の個人庭園に関して「その中に激しい流水を入れ、…砂で島を築き、激しい水で波を起こさせた」という記述が見られる。

後燕(5世紀)のとき建設された龍騰苑については、「天河渠を開削して宮殿内へ水を引いた。また、その昭儀(官名)である符氏のために曲光海や清涼池も開削した¹³⁾」と記されている。

6世紀頃、北齊で最後の君主となった高緯が仙都苑を建設した。この庭園内には中国の五名山を象徴する5つの山が築かれ、漳河から引かれた4つの流れが四海とされた。

北魏の洛陽城については、「華林園の中には大海になぞらえた魏天淵池が造られ、池の中には文帝九華台もあった¹⁴⁾」という記述が見られる。洛陽の城西については、「西遊園の中には魏の文帝に築かれた凌雲台があり…台の下に碧海曲池、台の東に宣慈観が設けられ、その高さは10丈である。観の東には靈芝釣台が木材で築かれており、その池からの高さは20丈である。…釣台を背景として石の鯨があり、それは地から湧き出して空中を飛んでいるように見える。釣台の南に宣光殿、北に嘉福殿、西に九龍殿がある。殿前の九龍に吐かれた水が池になっている¹⁵⁾」と記されている。

唐代の皇室庭園では水面を景観の中心に据える手法がとられ、長安の大明宮や興慶宮、東都・洛陽の西苑といった主な宮殿の庭園でも同じような手法が用いられている。唐代には漢の未央宮跡で通光殿が建設され、その両側に詔芳亭と凝思亭が造られた。

洛陽宮内の流杯殿も両側に配された亭が池を囲む配置形式である。また、渤海上京禁苑の考古遺跡でも似た配置方式がとられている。これら皇室庭園の美しい風景は、人々が西方浄土世界を描くための手本となり得る。宋代の金明池は水軍を訓練するために営造されたものだが、やはり配置上では整然かつ対称的にしようという意図が感じられる。

個人庭園、特に文人庭園の発展により、境地の表現が庭園設計の中心的内容となっている。そして、風、月、雲、水面、島、山などによる自然界の模倣・再現が庭園造営の主な方式とされ、整然かつ対称的な配置は主流から外れた。封建時代末期の皇室庭園では、そうした手法が用いられることもあったが(例えば、頤和園の前山建築群と昆明湖との対称関係)、それら庭園の手法は浄土世界という宗教的な意味をもたない。一方、皇室庭園も含む多くの庭園が、文人庭園のように境地を表現する方向へと発展していった(承德避暑山莊など)。

寺院について見ると、仏典で取り上げられている七宝の蓮池や八功德水といった内容は、寺院が好んで表現する題材であり続けてきたが、その配置の固定的な方式に関する記述は見当たらない。有名な寺院庭園である蘇州・西園では、放生池が中心に据えられて、東岸に「蘇台春滿」軒、池の中に亭がそれぞれ配されたうえ、2つの九曲橋で東西両岸が結ばれており、そうした配置上で「浄土変相」の痕跡が若干は認められる。そして、昆明円通寺は池を建築物で取り囲む対称配置となっていて、より「浄土変相」の方式に似ている。しかし、民国時代の写真を見ると、その池の痕跡がなくなっていた。また、寧波保国寺で南宋時代に開削された「浄土池」は水庭に近いが、池の中には平台や建築物がない。これは名称を借用したものと言うべきであり、一種の固定的な方式が反映されたものではなかろう。晋祠聖母殿の魚沼飛梁も似た形態だが、それと浄土信仰の関係は確認できない。

6. 結論

中国庭園の発展過程は、主として文人化の過程と言えよう。中国庭園の中で最も古い一部の皇室庭園は、営造後の発展において文人化の傾向がますます顕著になっていった。その過程では詩情画意の強調が最重要の内容とされている。中国庭園で詩情画意を強調する方法は土地に応じ、時に応じて変化し続け、固定的な方式が中国庭園の主導的な地位を得るには至らなかった。

水と水庭は中国庭園の重要な景観要素だが、同時に庭園の中で多様に移り変わる要素でもあり、その固定的な方式が存在するわけではない。

浄土変相とは、仏教の浄土世界に対する僧侶、工匠、供養者などの理解を表すものと言える。後世の中国の寺院で「浄土池」といった名称が使われ、敦煌壁画の「浄土」や「浄土変相」もある程度は唐代の建築物や庭園の状況を反映しているものの、そうした建築物や庭園の形態および配置が一種の固定的な方式として中国の寺院(浄土宗寺院も含む)や庭園で用いられてきたわけではない。また、中国で現存する寺院や庭園の中には、「浄土」という名称を用いたうえ敦煌の浄土変相図とも完全に合致するものが見当たらない。

註

- 1) 『蘭亭集序』
- 2) 『高僧伝・慧遠』
- 3) 『漢・魏・両晋・南北朝仏教史』湯用彤、武漢大学出版社、2008, P242
- 4) 『漢・魏・両晋・南北朝仏教史』湯用彤、武漢大学出版社、2008, P246
- 5) 『隋・唐仏教史稿』湯用彤、武漢大学出版社、2008, P179
- 6) 『長安誌』
- 7・8) 『西陽雜俎・寺塔記』
- 9) 『冷泉亭記』
- 10) 『元和郡県図誌』
- 11) 『三輔故事』
- 12) 『三輔黄図』
- 13) 『晋書・慕容熙載記』
- 14・15) 『洛陽伽藍記』

参考文献

- 1) 『漢・魏・両晋・南北朝仏教史』湯用彤、武漢大学出版社、2008
- 2) 『隋・唐仏教史稿』湯用彤、武漢大学出版社、2008
- 3) 『中国古典園林史』周維權、清華大学出版社、1999
- 4) 『江南園林史』中国建築工業出版社、1984
- 5) 『中国古代建築史』第二・三卷、中国建築工業出版社、2001, 2003



図－3. 太液池（左：蓬莱島南岸遺構、右：北岸建築遺構）



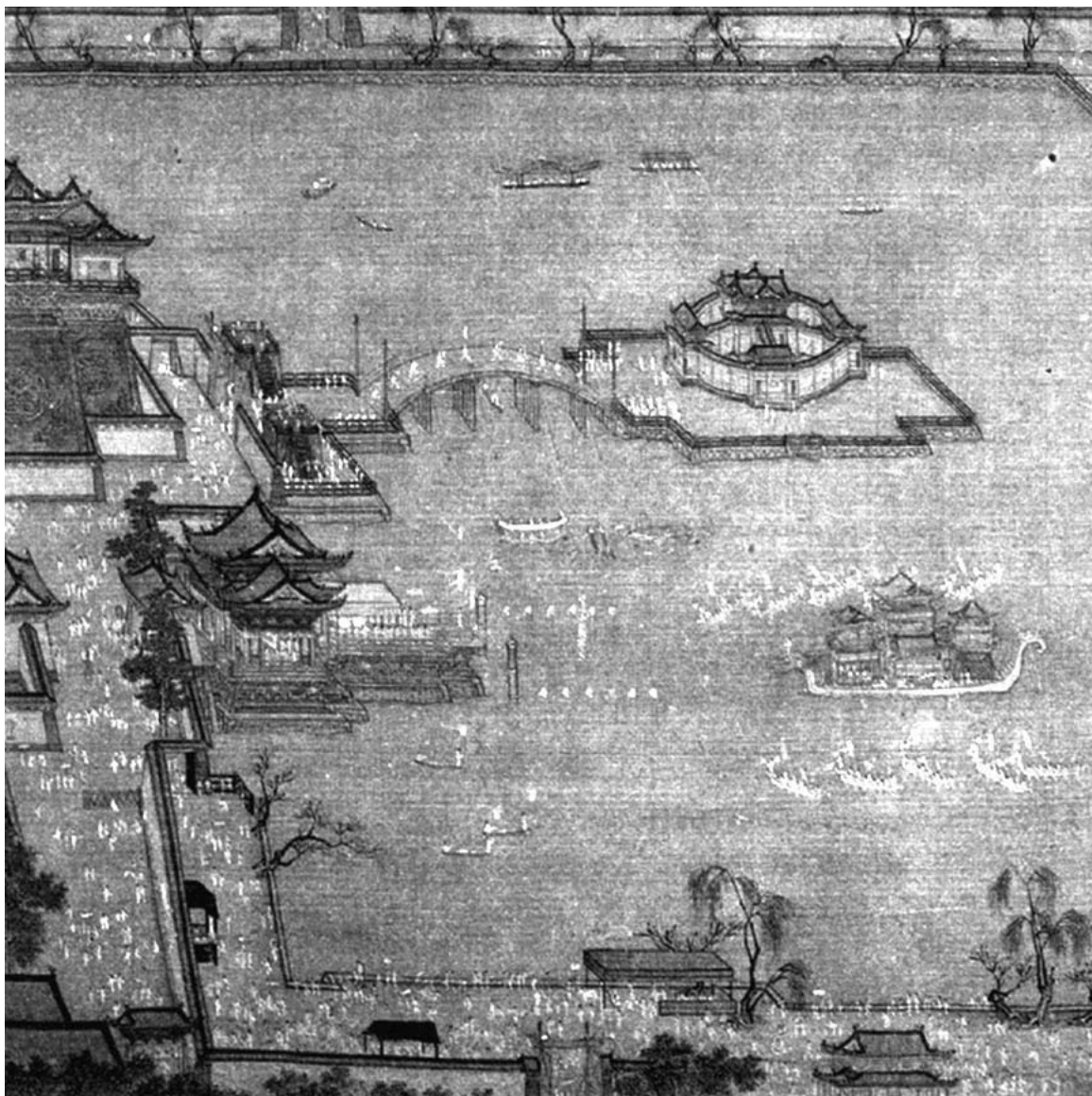
図－4. 漢宮図 趙伯駒（南宋早期；12世紀）



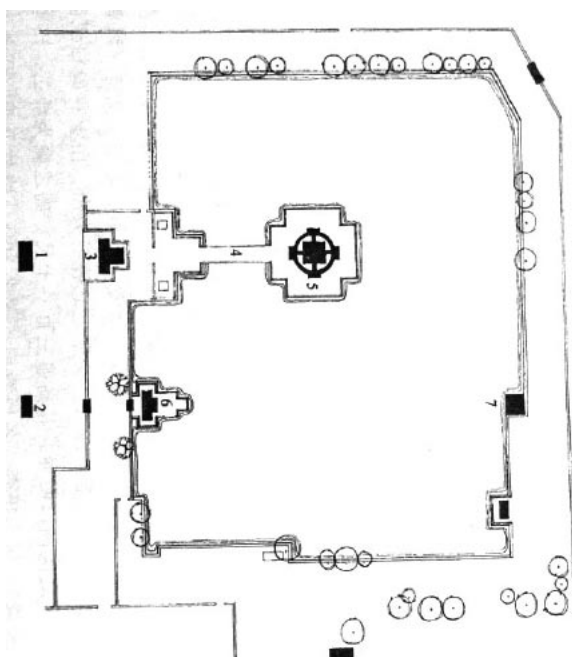
図－5. 風檐展卷図 趙白驪（南宋早期；12世紀）



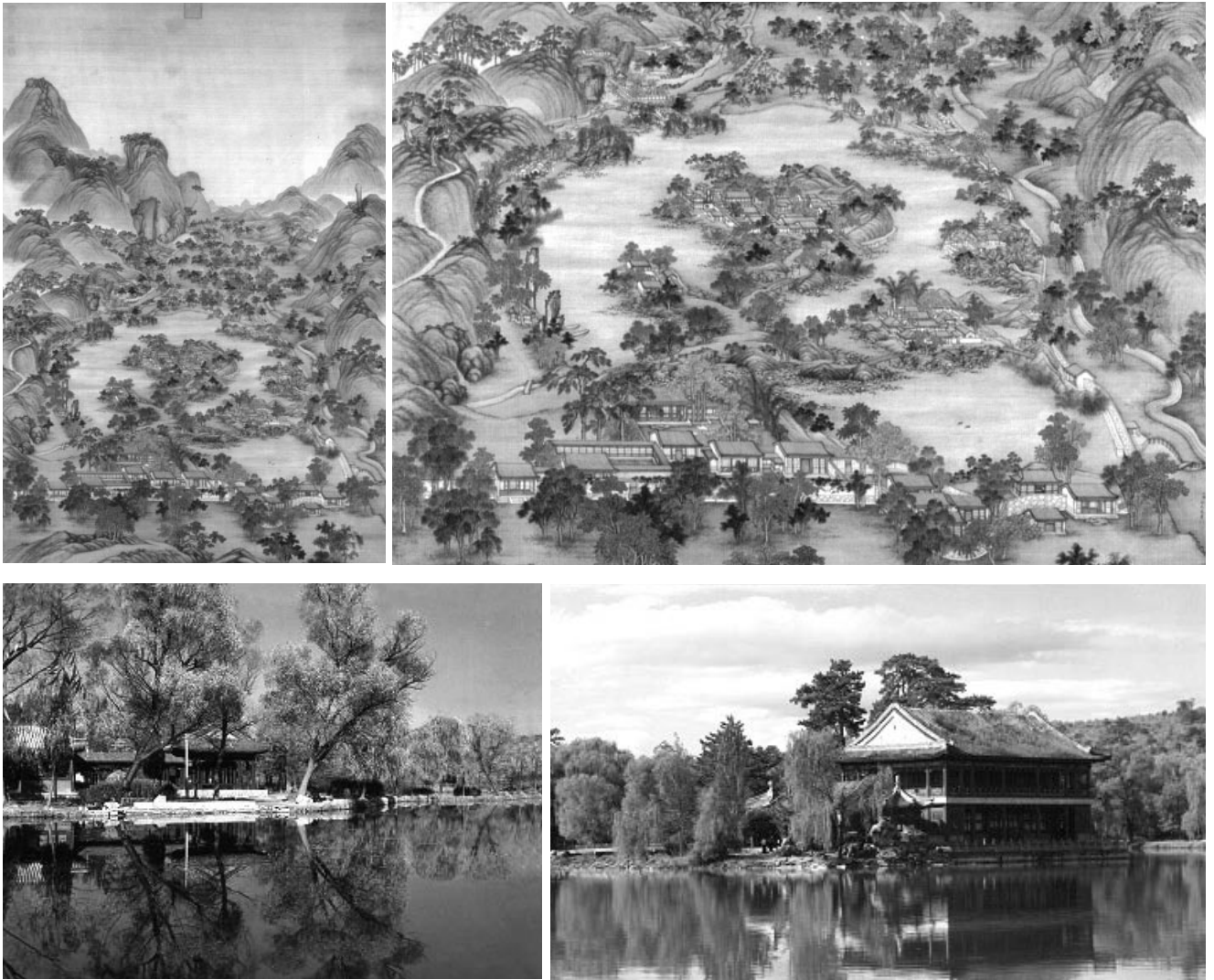
図－6. 高士図 衛賢（五代；10世紀）



《金明池奪標圖》



圖一 7. 金明池



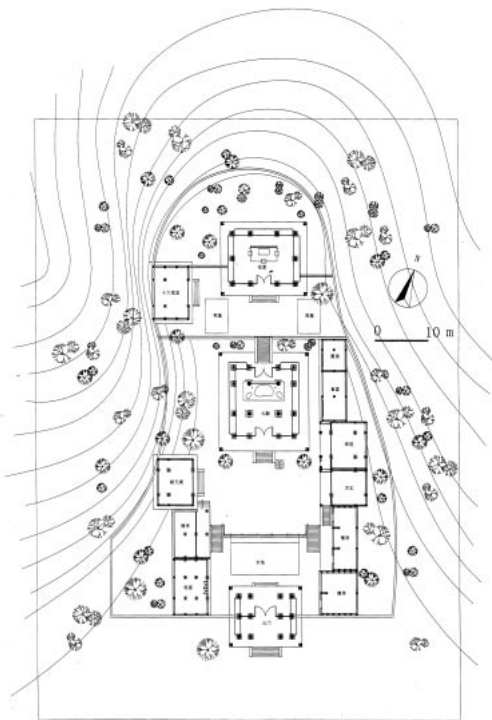
図－8．避暑山莊（承德）



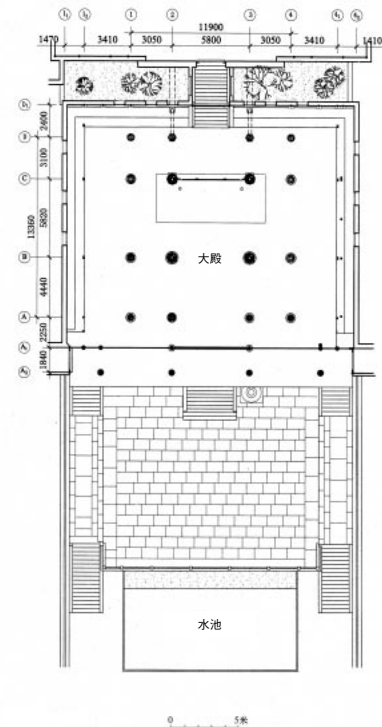
図－9．頤和園（北京）



図一 10. 拙政園（蘇州）



宋代の
境内構成

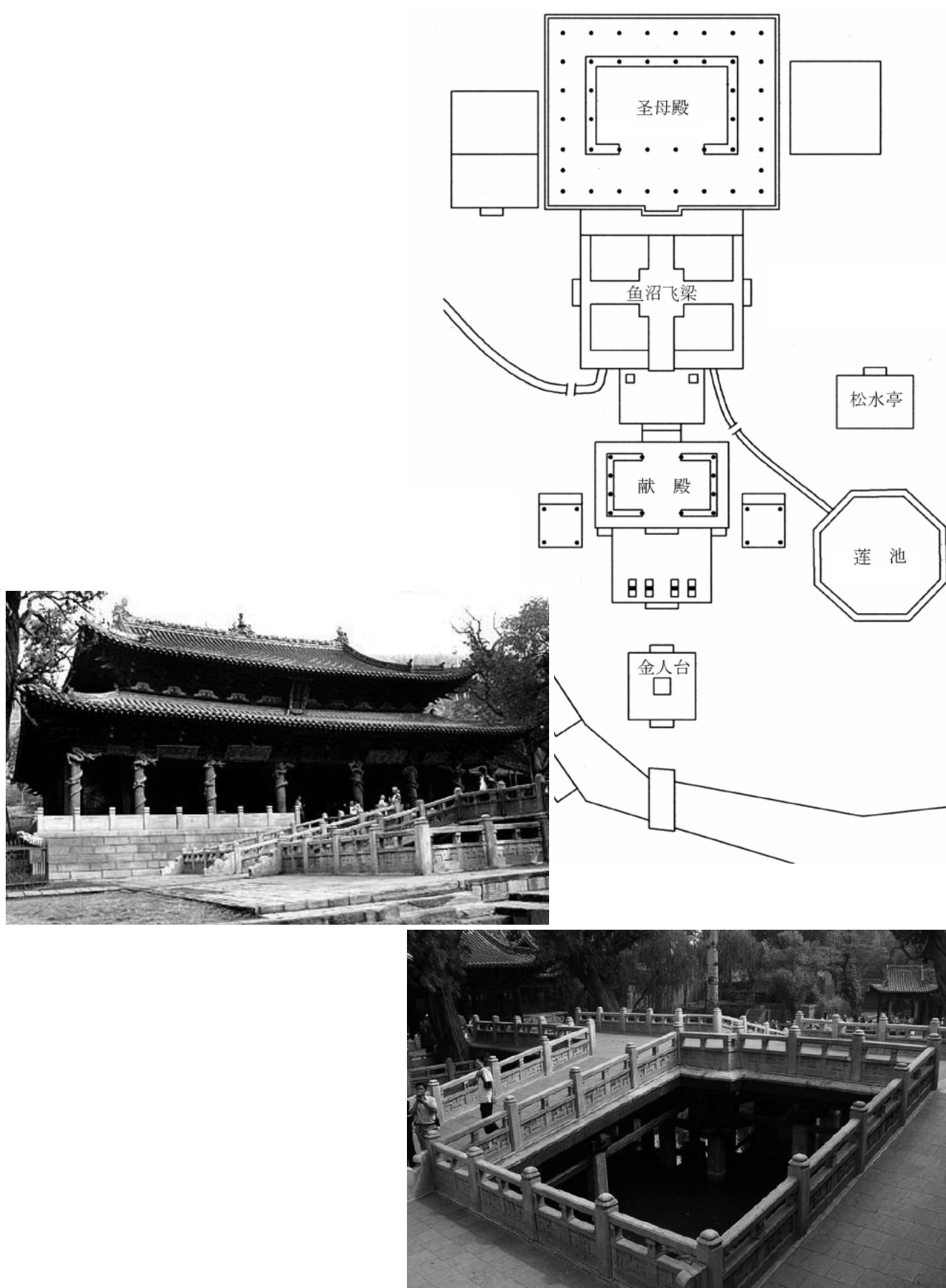


大殿と浄土池
の現況

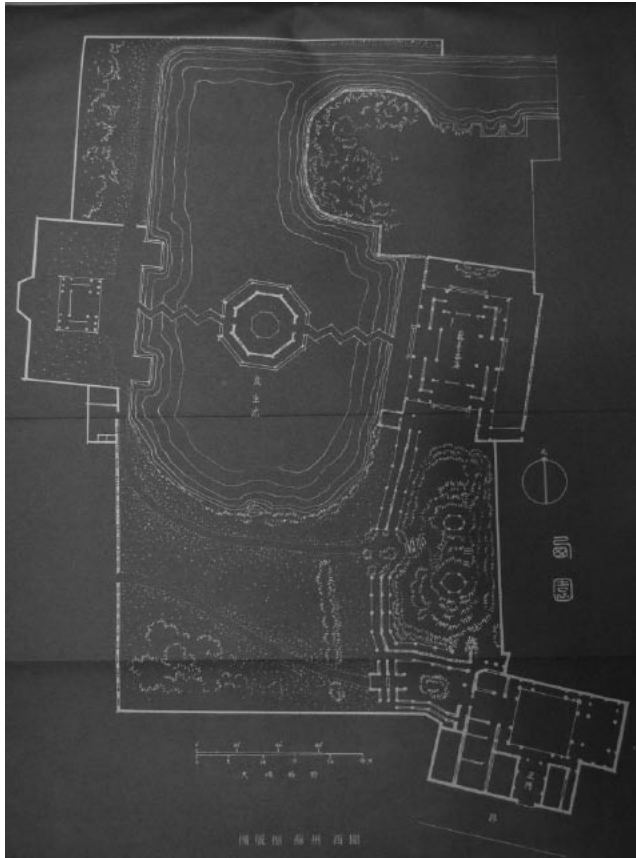
※図版は、『东来第一山—保国寺』（清华大学建筑学院 郭黛姮・宁波保国寺文物保管所）による。



図一 11. 保国寺（寧波） 大殿と浄土池



図一 12. 聖母殿と魚沼飛梁（晋祠）



図－13. 西園（蘇州） 平面図と創建当時の建物復元



図－14. 圓通寺（昆明）